

パネルディスカッション



パネルディスカッション会場①

コーディネーター紹介

佐藤 信（さとう まこと）

日本古代史専門。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了後、奈良国立文化財研究所研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学文学部教授を経て、現在、東京大学大学院人文社会系研究科教授

パネラー

明治大学文学部教授 吉村 武彦

九州歴史資料館学芸調査室長 小田 和利

東洋大学文学部教授 森 公章

熊本県教育委員会 矢野 裕介



佐藤 信 氏

司会…これより、コーディネーターの佐藤様に、「律令国家の確立と鞠智城く六九八年「繕治」の実像を探る」というテーマで、四名のパネリストの皆様によるパネルディスカッションを進行していただきますと思います。それでは、佐藤様、よろしくお願いします。

佐藤…よろしくお願いします。本日のシンポジウムは、一〇時半から、熊本県の蒲島知事さんのお話から始まり、矢野さんの調査経過の報告、吉村さんの基調講演、それから午後に入って、小田さんの大宰府と関連した講演、森さんの「繕治」の歴史的背景に關しての講演でした。ぜひ皆さん皆様もお疲れかと思いますが、これから約一時間半ほど、パネルディスカッションを行いたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

今回は、「律令国家の確立と鞠智城」というテーマなのですが、副題に「六九八年の繕治の実像を探る」ということで、かなり専門的なところに踏み込んで、テーマを設定させていただきましたが、皆様、これまでのお話を聞いていただいて、いかがでしたでしょうか。私などは、鞠智城をめぐっていろいろな歴史像が考えられるなあと、大変興味深く聞いていました。これまでの鞠智城に関するいくつかのシンポジウム、去年も東京・大阪でシンポジウムがありましたし、それ以前にも東京でありましたが、それらシンポジ

ウムに参加いただいた方には、かなり親しみをもって聞いていただいたかもしれませんが、初めて聞かれた方にとっては、すぐに「繕治」といわれても、具体的にどういう繕治なのかというところがあるかもしれません。

私なりに少し考えてみると、まず律令国家の成立ということが古代史の中でどういう意味を持つのかというと、とても大きな意味があると思います。主に七世紀中ごろから後半にかけて、律令国家の形成という経過があり、最終的に私どもは、大宝律令で確立したというようにいたします。その過程では、六四五年には乙巳の変が起きて、蘇我氏の本宗家が滅ぼされ、孝徳天皇の時代にいわゆる大化の改新の政策が行われ、六六三年には白村江の戦いの大敗北があり、日本列島で国家的な集中を図らなければいけないという事情があったと思います。

それから、今日のお話にあった大野城・基肆城の造営などがあり、鞠智城の造営もその直後であります。六七二年には壬申の乱があり、それを受けた形で、天武天皇・持統天皇の時代に律令制の制定とか、古代の都城の形成とか、様々な事業が行われるようになって、六八九年に飛鳥浄御原令という令ができる。六九八年に今日話題にしている大野城・基肆城・鞠智城の繕治ということがあり、七〇一年に大宝律令が確立するということです。

その間、六六八年に高句麗が滅亡してすぐに倭から遣唐使が行くのですが、その後、七〇一年に任命した遣唐使まで約三〇年間、日本から遣唐使は中国へ渡っていません。その間は、新羅との関係で

大陸・半島の情報を得たと思いますが、七〇一年に任命した遣唐使が翌年中国に渡った時に、初めて「日本」という国号を称して唐の皇帝とまみえるということが行われる。ということで、この段階に大きく日本列島における律令国家形成という歯車がどんどん回っていくという、急激な変化があったと私は思っています。

白村江の戦いの時の倭の軍勢は、ほとんど地方豪族軍の寄せ集めのような軍勢であったといわれています。ところがその地方豪族たちは、大宝律令、律令制のもとでは、地方の郡の郡司になるということですね。元は、七世紀半ば以前、国造くわみやつこと呼ばれるような、地方のそれぞれ「君きみ」として、一城の主的な立場から、律令制、官僚制のもとでは、国司の下に位置づけられる地方官の郡司として任命される、そういう形になっていく。大きな変化であったと言っていると思います。

その過程で、鞠智城の築城が行われ、六九八年に「繕治」というものが行われる。その時代がちょうど、律令国家の確立過程、中央政府が北や南に版図を広げる過程でもあり、そういう展開とどうリンクするのか。対外的にも、白村江の敗戦や、先ほど申した三〇年ぶりの遣唐使の派遣も含めて、アジア的な規模での様々な動きがある。日本列島の中でも、辺境における動きも絡む中で、中国の唐を真似して、律令制に基づく中央集権的な国家を築いていく。律令など先進文明の情報は新羅経由でも入ってきていたということだと思います。こうした過程は、私達古代史を学ぶ者は、具体的にどう変わっていったのかに非常に関心があるわけです。その過程の中で、六六三年以後の鞠智城築城や、

六九八年の繕治が、どのようにはまっていたかということです。日本列島全体の歴史、アジア全体の歴史の中で、どう位置づけられるかということになっていくかと思っています。

このように、私なりの今日のシンポジウムテーマの背景を話した上で、以下に、三つのテーマを決めて、パネリストの先生方にお話を伺っていききたいと思っています。

一番目は、鞠智城の築城をめぐる、築城の目的。二番目は、「鞠智城繕治を探る」というテーマにしたいのです。私は、築城と繕治の違いを際立たせて考えるという方向が有り得ると考えています。例えば、矢野さんやそのほかの先生方のお話にもありましたが、鞠智城で最も多くの土器が出土する時期というのが、繕治の時期なのですね。築城の時に最も多くの民衆を動員して、その時に多くの食器を使ったりして、土器が多く出土することだったら分かるのですが、その時よりはるかに大量の土器が出土すること、この鞠智城で最も多くの人々が活動していた時期がこの繕治の時期です。その後八世紀半ばになると、ほとんど少なくなってしまう。そういったことをどう理解するかというとき、二番目の繕治のテーマでも探るのですが、それでは築城の時はどうだったのかということにもなるかと思っています。それから三番目のテーマは、鞠智城の役割とその変化ということ、これはまた先生方に鞠智城をどう捉えるかということについて、それぞれご意見を伺いたいと思っています。

ということ、まず初めに、鞠智城の築城をめぐって、その目的は何かということについて、これ

まで鞠智城を調査され、報告書を作られてきた、矢野さんにお話を伺いたいと思います。矢野さんは今日ご報告の時間が短かったので、それを補う内容も含めて、少しお話をしていただきたいと思います。お願いします。

矢野

鞠智城跡の発掘調査は、昭和四二年から始まり、現在三二次を数えます。これだけ長く調査をしていますので、古代山城の中では最も調査が進んでいるものと考えています。先ほどの報告の中では言い尽くせなかった部分を少しご報告させていただきます。

鞠智城の創建期については、基本的に城としての機能を揃える必要があるということから、防御ラインである土塁・城門などの外郭施設の整備が優先されたものと考えています。

各遺構を見ていきますと、深迫、堀切、池ノ尾という三方所で確認されている城門は、すべて古いタイプの掘立柱の城門で、土塁を見ても、天智四（六六五）年に築城された大野城と非常に似た造りをしています。こうした遺構の特徴から、白村江の敗戦直後から、外郭施設を急速に整備していったということが分かります。その一方で、城内の施設、掘立柱の建物は、次の鞠智城Ⅱ期の施設に比べて小規模なものが多いということが特徴として挙げられます。このことから、城の外郭施設はきっちり造り上げようとする一方、城内の施設、倉庫とか兵舎とかは、ひとまず応急的に整備したものと考えられます。出土土器においても、鞠智城Ⅱ期にあたる土器は、鞠智城の中でも最も多く見つかっ

ていますが、その一方で、鞠智城Ⅰ期の土器というのは数少なく、限られた量しか出土していません。

そうしたことから、鞠智城Ⅰ期というのは、とにかく唐、新羅が侵攻してくるにあたって、国家防衛網を構築していく中、早急にこの地に城を築かなければいけないという考え方のもと城が造られた段階と想っているところだ。

また、鞠智城の築城に関しては、残念ながら文献の記録が無く、この年に確実に造ったというのは言えない状況にあります。ただ、鞠智城「繕治」の時期に同時に繕治した、大野城・基肆城とほぼ同時期、あるいはやや遅れた時期に築かれたということは、ほぼ言えるのではないかなと思っています。

佐藤..はい。唐・新羅に対する国家防衛網として創建が急がれたというお話ですが、その際、やはり鞠智城の場所が熊本県の北部の、有明海からやや内陸に入った菊池川沿いの地にあるということですが、その場所で国際的な危機感とどう結びつくかということに関して、矢野さん、もう少し補足していただけないでしょうか？

矢野..鞠智城の場所というのが、菊池川の有明海河口から直線距離で三〇キロメートル内陸に位置しているのですが、三〇キロメートル位だから、海が見通せるのではないかと思われるかもしれませんが、海の手前に低い丘陵が連なっておりまして、残念ながら有明海を見通すことができません。

ただ、車路くるじという地名が、熊本県の北部にところろ残っており、それをつなげるような形で、鞠智城の近くに、当時の主要道路となる古代官道のラインが想定されています。九世紀に編纂された『延喜式』に、大水、江田、高原、蚕養、球磨といった駅家の名前が見え、その候補地が熊本県の西の方、九州縦貫道沿いにあることから、平安時代の古代官道は九州縦貫道沿いのラインが想定されていますが、鞠智城が築城された当時は、東の方に回って、鞠智城の近くを古代官道が通っていたものと考えられています。

現在でもそうなのですが、鞠智城がまたがる菊池市中心部は、熊本市に向かう道、福岡県南部に向かう道、大分県の日田市に向かう道、それと、阿蘇に向かう道が交わり、いわゆる交通の要衝で、古代においても同じことがいえ、そうしたことも、鞠智城がこの地に築かれた、一つの経緯だろうと考えています。

おそらく築城当初から、南の有明海、八代海を経由して、そこで上陸した外敵が道伝いに北へ侵攻してくる経路の、ちょうど正面に鞠智城が位置し、南から侵攻してくる敵を、迎え撃つ役割があったのではないかと考えています。大宰府に物資や食糧を供給する後方支援の役割というのも当然あったと思いますが、その一方では、南からの敵を迎え撃つ南の防衛拠点であったと考えているところです。

佐藤…古代の文献を見ましても、有明海に外国の人がたびたびやって来るといふ記事はよくあります。九世

紀でも、新羅からの遣唐使がここに漂着したという記事もあり、九世紀に新羅と日本の国際関係が緊張した時に、鞠智城がまたクローズアップしてくるという事情もあります。また、肥後の地方豪族の肥君、葦北君の一員が、七世紀の半ばに、百済の国の顧問のような地位になって、日本と百済との外交関係上で活躍するというような話もあります。この有明海沿い、肥後国というのは、アジアに向かつて開かれた土地であつたということは、文献のほうからも言えるのではないかと思います。

そういった対外的なことも含めて注目したいのが、大宰府の存在です。「繕治」の主体である中央政府が、大宰府をして三つの城を繕治させたという記事であります。大野城・基肄城の場合は、百済から亡命してきた貴族を派遣して築城するのですが、それに準ずるような形で鞠智城も築城が行われたと思われているわけですが、小田さん、その大宰府との関連で、鞠智城築城の目的に関してお話しただけでないでしょうか？

小田…その前に、大宰府の最初の建物ですね。いま整備されているのはⅢ期とっている一〇世紀後半の建物ですが、一番下層にⅠ期とっている時期の建物が存在します。このⅠ期というのも、年代的には白村江の戦いに敗れた直後の建物と見られているのですが、Ⅰ期でも古段階と新段階がありまして、Ⅰ期の古段階というのが白村江の戦いの直後くらい。新段階というのが七世紀の第4四半期の前半と後半に分かれています。Ⅱ期の造営段階というのが直前にありまして、それから礎石の建物に変わ

ます。

そういった建物の変遷が確認されていますが、その最初のⅠ期の建物をどう見るかというのも実はあります。といいますのが、Ⅰ期の古段階を白村江の戦いの後にこの場所に移ってきたかどうかといった問題が出てきます。それから、水城であるとか、大野城、基肄城であるとか、それが立地する場所とこの政庁の場所といえますか、Ⅰ期の大宰府との関係が少し問題になってきます。

個人的な意見を述べさせていただくと、私の説明の中でも少し触れましたが、水城を斉明天皇に絡めて考えていることがあり、朝倉宮を守るために当初の水城を築いて、その後の六六四年の段階で、後の大宰府になっていくⅠ期の大宰府といえますか、それを守るということで二段階の造営を実は考えています。当初は朝倉宮を守るということで水城が存在して、その後に大野城・基肄城が造られて、Ⅰ期の大宰府、那津屯倉から移ってきたともいわれていますが、私は磐瀬宮の機能がⅠ期の大宰府に関連していると見ているのですが、そういったことで、次の第Ⅱ期の政庁になっていく施設、それを防衛するという意味で、大野城と基肄城が存在すると考えています。それと、先ほどから有明海の話が出ていますが、朝倉宮というのを朝倉市杷木町の志波地区に想定していますが、筑後平野の一番南東の左翼部に位置します。その前面に筑後川という川が流れていまして、それが有明海に注いでいるわけですね。一つの逃げ道として、豊後に抜けるいわゆる豊後道といっているものを利用し、それから船を通じて、瀬戸内の方に入っていく。もしくは四国の南から入るルートが考えられます。有明海

のルートを考えてときに、やはり、年代的なことはあるかと思いますが、鞠智城の存在はとても重要なものになってくるのではないかなと思います。

佐藤…今のお話に出てきた、大宰府と鞠智城をリンクさせて考えるときに、先ほど、矢野さんのお話にあったように、鞠智城の場合、築城期と繕治期とでは、繕治期のほうが施設などが充実するというお話がありました。大宰府の場合も、七世紀の白村江の戦い直後の段階というのがまだ本格的なものではないという点では似ているのかもしれませんが。六九八年の鞠智城繕治の時期よりも少し後の、太宰府Ⅱ期の八世紀前半の段階で、大宰府自身は朝堂院形式の礎石建ちの建物になって、藤原純友の乱で焼けた後にもう一度利用したⅢ期の礎石が今も「都府楼」に残っているということだと思います。そのオリジナルとなる、立派な礎石で立派な建物が築かれたのが、八世紀前半のⅡ期であるという解釈だったと思いますが、その年代的な差はどう考えたらよいか、何か意見はありますか。

小田…Ⅱ期というのが、年代の決め手としてるのが、南門であるとか、中門であるとか、瓦葺の礎石の建物に造り替えたときに、地鎮符といって、今でも家を建てる時に地鎮祭などを行いますが、その際に土器を埋めているんですね。基壇の下部といいますか。そこに入れて、建物が火事などに遭いませぬようにとか、そんな祈念の意味で土器を入れます。その土器が、南門・中門の基壇から出ています。

その土器の年代を八世紀の初頭あたりに置いてあるわけですね。それと、瓦葺の建物ですが、政庁の場合は鴻臚館式という瓦が使われますが、そういった瓦の年代であるとか、土器の年代であるとか、そういったものから八世紀の前半と年代を置いているわけです。

先ほどの六九八年の大野城、基肄城、鞠智城の繕治記事は七世紀末ですが、大野城などは、水城もそうですが、政庁のⅡ期になって、瓦葺の城門に建て替えられます。その年代からしても、少し、数十年の齟齬が生じるわけですが、繕治があつて、その後すぐに瓦葺の建物に替わっているということになります。実は、そこらへんが、遺構上では確認されていないという状況はあります。今回、鞠智城が「繕治」ということで取り上げられていますが、大野城・基肄城についても、「繕治」についてももう一度考え直す必要があると思っております。



パネルディスカッション会場②

佐藤…そうですね、大野城が瓦葺で立派になるのが、Ⅱ期で八世紀前半くらいというのが、今の段階での考古学的な知見だということですね。基肄城はまだそこまで研究が進んでいないということだと思えます。鞠智城では近年かなり発掘が進みましたので、この「繕治」という時期に何があったのかが話題にできるようになったわけですが、これはやはり大宰府、そして大野城・基肄城の調査・研究が進めば、時代のズレがどうなるのか、あるいはそれぞれの性格、あるいは順番がどうだったかということも含めて、それから、周りの城の修理を先にしてから大宰府本体がリニューアルするのかどうかということも含めて、これからの調査・研究の成果にかかってくるような気がします。

ここまでの話を踏まえた上で、鞠智城築城をめぐる問題について、吉村さんをお願いしたいのですが。

吉村…この四、五年でしょうか、一般の市民の方と『日本書紀』の天智天皇紀と天武天皇紀を読んでいます。かつては同時代的な史料がないと危ないといわれていましたが、今は天武紀に入って三、四年目くらいになります。最近話題になった「白錦後苑」、飛鳥時代の庭園、苑池遺構なのですが、どうも事実と符号するような、つまり、『日本書紀』に、実際に飛鳥で展開していたような記録が認められます。ですから、『日本書紀』を実際にどう読むか、実は、明治大学には、『日本書紀』は編纂した時の事実であって、歴史として読むのはけしからんという、そういう方もおられますので、いつも緊

張感を持ちながら読むのですが、今、問題になっている『天智紀』の場合も、長門国に城、筑紫国に大野・椽の二城を築くというのがあります。

文献のほうからですと、もう一つ問題になるのは、例えば武蔵国とか、下総国、上総国、こういう令制の、大宝律令制度の国がいつできるのか。普通は天智朝にできるのではないかとされていますが、筑紫国ということですから、当時の国境線が変わっていないとすると、大野城は筑前、基肄城が肥前になりますよね。ですから、もともと国境線をまたいで大宰府を造ることなのか、いやそうではなく、大宰府を造ってから後に国境線を引いたのか、これも大きな問題かと思います。

いずれにしても、筑紫国ですから、後の筑前・肥前に分かれますから、結局それぞれの国で築城するというのは、僕は難しいと思うんですね。ですから、ただ筑紫国と書いてあるのだと思います。七世紀の後半には、森さんも言われましたが、総領・大宰というのと、国宰くわにみの二つの制度があつて、奈良時代になってから他の大宰・総領が無くなり、筑紫のみ残ります。天智六年になると、大和国高安城、讃岐国山田郡屋嶋城、対馬国金田城など、かなり令制国があるように書かれています。最初の段階から大野・基肄城を含めて大宰府を造っていくという姿勢があつたものと思います。ここに鞠智城が入っていないということは、阿志岐城がいつできたかもよく分かりませんが、いわゆる神籠石系の山城も結構ありますので、必ずしも明白に意図されていなかったのかもしれない。ただ、その後の段階になりますと、これは「大宰府をして」と書いてありますから、筑紫ではなくて、同じ七世紀

末でも大宰府云々と書かれています、それをどう意味するかということです。

それから、鞠智城に関しては、大宰府という私たち北を見て考えることが多いと思うのですが、今でいうと福岡とか佐賀になりますが、先ほど佐藤さんが言われましたように、例えば、肥後の国には、日羅という、倭人でありながら、百済に行つて官僚になる人が出てきておりますし、菊池川流域というのはかなり装飾古墳があるところで、これはやはり朝鮮半島との影響を考えていかなければいけません。私が最初に装飾古墳を見に行った時に、船に馬が乗っていて、天文現象が書かれているような、そんな装飾古墳もありまして、結局、この熊本の後肥という国と、先ほど佐藤さんが言われましたように、対東アジアといいますか、朝鮮諸国ですね。その交流というのはすごいものがあつたのではないかと思います。そういった意味で、博多湾向けと、有明海、あるいは八代海ということになるかもしれませんが、鞠智城は、大宰府の後方支援になりつつ、かつ、有明海・八代海を睨んだというような面が、築城当時にあつてもおかしくないのではないかと考えています。

それから、大宰府は、よく百済の扶余と比較されますが、ただ扶余は、河川が曲がりながら流れていて、その真ん中にあるのですが、これもよく考えると、扶余で敗退して、同じようなものを大宰府に造るというのは少し考えづらい。むしろ百済の扶余の経験を積んで、大宰府を造ると。ですから、今日ご紹介がありました、阿部義平さんの、羅城的なものも一つは非常に参考になるというか、あれは扶余の形とは違いますよね。扶余も、外郭は確かに山で囲っているのですが、内郭的なものはちよっ

と様子が違うのではないかと思います。ですから、扶余との比較もいいのですが、百済は負けたという意味で、負けた人が日本列島にやってきて指導するわけですから、やはり負けない城づくりというのも考えたほうがいいのではないかと考えています。

そういうところで、何か一つの目的というよりも、結局、白村江の戦い以降の西海道をどう守るかという、そういうレベルで考えていくと、やはり北の博多湾の問題、それからちよつと肥後国になりますけれども、有明海、あるいは八代海とかを睨んだところで、大宰府とも関係がありますし、築城当初は南の方との関係は分かりませんが、南との展開を意識するというよりも、有明海、もしそちらでやられたらどうするかということがあるかと思っています。もちろん「繕治」の段階では、この天智朝ではありませんが、何かそういうものができていても、同じところに国府と別のものを作るとは考えづらいものがあります。ですから、やはり菊池川流域をおさえるということの意味、これは河川と穀倉地帯というか、そういう兵站基地としての、背後としてはいい場所ではないかと思っています。

佐藤

肥後と朝鮮半島との関係というと、先ほど申し上げた肥後の地方豪族が、百済の高官に昇った人がいるというようなことだけではなくて、吉村さんがおっしゃったように、例えば江田船山古墳で出土した銘文の太刀も有名ですが、一緒に出土した金銅製の武具だとか、装飾品が、百済系ですよ。垣根なく百済と交流していたということだと思います。そういったこともあって、鞠智城を理解するとき

は、もちろん大宰府の後方支援的な性格と同時に、有明海を通した前進基地的な意味合いもあるのではないかと思っています。菊池川流域は肥後国最大の穀倉地帯ですので、そこを抑えるという意味もあって、そして菊池川の水運は現在より遥かに使っていたでしょうし、有明海がもう少し内側まで及んでいたと思いますので、その距離をあまり大きく見すぎないほうがいいかなと、私はいつも思っています。

国がいつからできたかというお話もあって、ちょうど先ほど、律令国家の確立過程というのをいろいろな面で検討しなければいけないと言ったのですが、小田さんのお話でも大宰府自身がだんだんとできていくし、吉村さんのお話にあったような、軍団制とか、それとリンクした戸籍制、民衆把握という律令国家のあり方ですね。あるいは国司制の成立をめぐって、総領・大宰、国宰くにさへのあり方から、律令制的な国司制になっていく段階、その段階をどう捉えていくかということが、鞠智城の理解にも深く関わってくるとあらためて実感しました。

最後になりますが、森さん、築城に絡めてのお話をお願いします。

森

やはり有明海方面との関係で言いますと、大宰府の前身となる筑紫大宰、推古朝に一応文献的には出てきて、百済が中国に派遣した使いがいて、それが有明海方面に漂着をして、筑紫大宰を経由して中央に来るという情報が来て、それに対応するという記事もありますから、古くから有明海とのつなが

りですね。さらに遡れば、先ほどの六世紀の倭系の百済官僚といわれている、肥後の葦北地域を主体とした日羅ですね。もともとお父さんの代に、大伴金村かなんかの命令で百済に行ったということで、九州の豪族が朝鮮半島で活動しています。さらに五世紀の江田船山古墳というところで関係がありますから、やはり歴史的に、そちらの方についても目配りをしないといけないということは筑紫大宰も分かっています、有明海方面との関係で、鞠智城は置かれたということがあると思いますね。

それから、吉村さんの話を聞いていて、鞠智城は河口から三〇キロメートルくらいのところですね、昔から何故こんなところに置かれたのかと思っていました。大宰府との関係ともいわれていますが、先ほど、扶余と大宰府は違うのではないかというお話でしたけれども、扶余というか、泗泚というところですね。錦江の河口からはちよつと遡ったところにあります。つまり山城を造る時、誰がそこを選地するかという問題を考えたとき、もちろん鞠智城のあたりに城を造るというのは、先ほどの肥後国の歴史的なところがあると思うのですが、百済系の菩薩像の出土などから見て、大野城・基肄城と同じように、亡命百済人の技術者が造ったというように思います。そういう選地をする時に、どのあたりに造ったほうがいいかと考えて造ったというのはないのかと。確か、泗泚はかなり河口から遠いと思っていたのですが、大宰府は一〇キロメートルくらいですかね。最初、筑紫大宰は、推古朝のあたりにはたぶん那津官家なつのゐけという、博多のあたりにあったと思いますから、そこから大宰府は二キロメートルくらい下がったところにあつて、水城がそういうところに来たのは、もう少し何か、百済

人の防衛構想みたいなものはないのかなあと、少し思いました。

佐藤

防衛構想として、大河の河口部からは奥に入ったところに扶余という都を、百済最後の都ですが、営んだということですね。今のソウルも、漢江という大河の河口部の仁川よりちよつと入ったところにあるわけですが、そういった選地に、百済人の防衛観念が背景にないだろうかということですね。その点について少し、矢野さん、鞠智城における百済的なものについて、鞠智城の調査成果でこういう点が百済的ではないかということで、先ほどもご説明があつたと思いますが、版築の仕方だとか、技術的なもの、あるいは菩薩像ですね、百済で製作されたといわれておりますが、いくつか挙げていただけないでしょうか。

矢野

鞠智城と百済の関係を表すような遺構・遺物ですが、一つは先ほどから話題になっています銅造菩薩立像です。これは、七世紀中ごろに百済で造られたと九州大学名誉教授、大西修也先生からご指導をいただいているところです。

また、土塁については、やはり版築工法、土塁の前面に柱を立て、そこに板を渡して、その板と内側の壁との間に土を入れて棒で突き固め、また土を入れて棒で突き固めてというふうな造り方で確実に造っておりますので、百済に限定できるのかどうかは分かりませんが、朝鮮半島から伝来してきた

技術により、構築されているということは言えます。

それから、平面形状が八角形の建物跡。これは鞠智城Ⅱ期、鞠智城「繕治」の時期の遺構ですけれども、現在、国内では、大阪の前期難波宮跡や群馬県の新井家遺跡でも見つかっています。ただし、構造的には違いがあり、前期難波宮跡のものは真ん中の心柱がない構造で、三軒家遺跡のものは、心柱を中心に放射状に回るような柱配置ではなくて、横の並びで八角形を表しています。そうしたことから、双方とも平面的には八角形ですが、上屋構造に違いが認められる建物ではないかと考えています。

類例を求めますと、韓国のソウル近郊に位置する京畿道河南市にある二聖山城で同様の建物跡が見つかっています。鞠智城のものは掘立柱の建物ですが、二聖山城のものは礎石建ちの建物で、真ん中に心柱の礎石を置き、その周りに八角形状に柱を放射状に並べており、構造上非常に似ています。ただ、この二聖山城は、今のところ、出土遺物から新羅の城ではないかといわれています。

最後に、単弁八葉蓮華文軒丸瓦があります。ただ、大野城や大宰府で出土している単弁八葉蓮華文軒丸瓦とは文様の形状に違いがあります。古くから百済系の瓦といわれてきたのですが、近年では、新羅に系譜を持つ瓦あるいは高句麗の様相を持つ瓦などの見解もあります。

佐藤…韓国のソウル近くの、河南市の二聖山城では、八角形だけではなくて、九角形とか、十二角形の建物

もあり、それから貯水池がやはりありますよね。その点は少し似てると感じもします。

そこで、次に、二番目のテーマであります、今日のシンポジウムのテーマでもあります、「繕治」ですね。六九八年に『続日本紀』に、大野城、基肄城と鞠智城の三つの城を中央政府が大宰府をして繕治せしむという。繕治が六九八年に行われたということについてどう理解したらよいか。例えば、目的としては、森さんのお話の中には、隼人とか、南島対策という歴史的背景があるのではないかと、いろいろありますが、いろいろなことが考えられると思います。

最初に、やはり矢野さんのほうから、「繕治」の時期の調査成果の特徴について、もう一度説明していただけないでしょうか。

矢野…鞠智城Ⅱ期は、鞠智城の変遷における各期の中で、最も城内の施設が充実するということが特徴として挙げられます。城の中心域となる長者原地区の北側にコの字型に配置された建物群、城の中枢施設となる「管理棟的建物群」が出現するというのが大きな特徴になります。さらに、その南に八角形建物や大型の総柱倉庫が配置されるということで、城内の施設が最も充実した時期に位置づけられるのではないかと思います。それから、この時期の土器が非常に多く出土していることから、城の管理・運営にあたって、多くの人員を配置したのではないかと考えています。

こうしたことから、鞠智城の繕治というのは、単なる修理や補修のみで捉えられるのではなく、

その修理、補修は、城の役割・機能、そして管理・運営の変化が伴うものだったのではないかと考えておるところです。

佐藤…続きまして、小田さんのほうから。先ほども、大野城・基肄城の繕治についてのこれまでの調査成果についてはお話しいただいたのですが、もう一つ、大宰府が、大野城・基肄城、鞠智城もそれに入れていただきたいのですが、配下の山城をどのように把握し、支配したのか。城の司といった役所があるのか無いのか、そういったことを含めて、ちよつとお話をしていただけないでしょうか。それから、大宰府や大野城・基肄城にとつての、ちよつと六九八年から大宝律令ができるころの時代。これは大宰府にとつても、律令官僚制の確立という意味で影響がある時代だと思うのですが、その点についても触れていただけるとありがたいです。

小田…先ほど、大野城はよく分からないとお話ししましたが、実は城門跡が、以前は四カ所だったのですが、それが平成一五年の大水害があつて、平成一六年から修復の調査をやっていますが、最終的に九つに城門が増えています。

メインとなるのが南側にある大宰府口の城門です。これは大野城が造られた当初からあり、三時期の変遷がありまして、二回ほど城門を建て替えています。それと宇美口というのがあります。百間石

垣のすぐ横に存在するといわれている城門になるのですが、こちらから川の中からⅡ期とみられる礎石が出ていますので、おそらく当初から何時期かにわたって城門が存在したというふうに見られます。

残りの七カ所の城門なんですけれども、坂本口・水城口については以前から分かっていたのですが、そのあと、原口・観世音口、そして北側で、北石垣・小石垣・クロガネ岩というのが新たに見つかりまして、新たに見つかった城門のほとんどが懸門式といって、城門の底面といえますか、それから一段段差がついています。梯子を架けないと中に入っていけないような構造の門になります。年代的には七世紀後半、細かい時期は何年とははっきり言えないのですが、そういった城門が増えています。当初の守りからすると、城門は少ないに越したことはないのですが、今のところ九カ所確認されています、場合によっては城門を新たに付け足したのが、繕治の記事に関連づけられるのではないかと思っています。

それから、城の中には七〇棟ほどの倉庫があると申しましたが、当初は掘立柱の建物、それが礎石の倉庫に変わっていきます。二カ所しか城門がなければ、周囲がだいたい六キロメートルほどありますので、ぐるりと三キロメートルほど回る必要が出てくるわけなので、礎石の倉庫を造る際に、入り口となる城門を設けないとロスが大きいですか、そういったことと絡んで、城門を新たに増設していく。そういったことが、ある意味「繕治」という記事で表現されているのではないかという気がしています。

それから、大宰府の役割で、大宰府自体、律令のころになりますと、職員が五〇名になります。帥以下、五〇名の職員で大宰府を運営します。実際には臨時職員の人がいて、二〇〇〇人くらいの方がいたといわれていますが、その中で大野城司と防人司という役職名で出てきます。大野城司というのはまさしく大野城の運営や管理、そういったことを行う役所だと思えますが、それと防人司ですね。辺境の防衛・防備にあたった、そういったものを管理する役所も、大宰府の中に置かれます。また、警固所というのがありますが、地名でいうと福岡市の方に警固という地名がありますが、こういった警固所あたりも、外敵からの警護といえますか、そういったものも担ったのではないかともいわれています。そういった役所あたりが、大野城、基肄城、または鞠智城の造営や繕治に関わっていた可能性は十分考えられるのではないかと思います。

佐藤

大野城司という役職があり、大野城には大量の稲穀が蓄積されているわけです。古代の山城というのは、敵が攻めてきたときに、そこへ役人や兵士が民衆と一緒に逃げ込んで、ひたすら守って、敵の兵站が尽きて帰っていくのを待つといった戦い方だと思えます。実際に高句麗という国はそれで隋の大軍を三度も押し返した歴史的な事実があります。古代の山城はそうした役割を持っており、中にそういった防衛のための施設と同時に稲穀を収納する米倉がたくさんありますから、それをしっかりと守らなければいけないということですね。そういったことも担当し、それから日常的な修理

もちろん担当したと思いますが、大宰府の役人として、そういった司が置かれているということです。

筑前国司が管理するのではなくて、大宰府の府官が直接担当するということで、同様なことが基肄城や鞠智城であり得るかということを考える必要があります。先ほどの講演でもありましたとおり、基肄城の場合は、不丁地区から出土した木簡の中に、大宰府の役人が基肄城の米を筑前や筑後、そして肥国、肥国は熊本県を含むわけですが、これら諸国に分配したことが記載されています。つまり基肄城に備蓄されている米は大宰府の役人が管理していることを示す八世紀半ばの木簡が大宰府から出土しています。基肄城にも立派な倉庫が、途中で礎石建ちになる倉庫群があるのですが、その管理は大宰府が直接していたということが、この木簡によって分かります。後には国司に代わるかもしれませんが、八世紀半ば段階ではそうです。

鞠智城もそういうことがあり得ると思います。大宰府の直接管轄なのか、肥後国の管轄なのか。実際には、大宰府からかなり離れておりますので、鞠智城の日常的な管理には、大宰府が関与する部分と、肥後国司が関与する部分と、地元の菊池郡が支える部分があると私は考えています。これは、鞠智城で出土した米につけられた荷札木簡に、「秦人」という名前が出てきているのですが、これは国名・郡名が書かれていないので、おそらく菊池郡の人と見て間違いないと思います。いろいろなレベルで鞠智城に関連している組織の人々がいたと見てよいと思います。鞠智城の築城自体は中央政府も関与

して百済から渡来した貴族たちが関係した場合もあり得ると思います。そういう鞠智城についての直接の史料はあまり無いわけですが、大野城の場合は、そういった形で史料が残っているということです。

それから、お話の中の懸門式というのは、高い所に門が造られていて、門を通ろうと思うと、下から梯子か何かで登って行って、門を開けて入るという構造です。そこからは、例えば大量の米俵を入れるとか、そういうことにはあまり適していないと思っていいたいでしょうね。

小田…そうですね。防御的な性格が最も強いかと思います。

佐藤…むしろ見せつける門ですよ。敵が攻めてきても、こんな門があつて、立派な施設だと。実用としては、門としての機能はなかなか果たしにくいのではと、私は思っています。その点では、鞠智城ではいくつかの門の構造で、唐居敷の石があり、これまでのシンポジウムでも取り上げていただきました。そういう研究が進めば、その技術の伝来、あるいは大野城・基肆城との城門の構築方法の比較ができるかな、と思っております。

それでは、次に「繕治」について、吉村さんお願いします。

吉村…このシンポジウムの準備をする時に、まずは、『六国史』における「繕」という言葉の検索をネット上で行ったのですが、二〇カ所ほどヒットしました。実は、朝鮮半島では行政単位でも城が出てきますが、その「繕」というのが出てきましたから、これはなかなか今まで誰も気づいていないことが言えるかなと思ったものですから。『日本書紀』から見えていくと、実は、「繕」という言葉はいろいろな意味で使われていることが分かりました。例えば、武器の修理みたいなものも「繕」。それから「繕写」という公文書も繕い写すというのが出てきてまして、かなり一般的な用語だというのが分かりました。実際に「繕治」が出てくるのは、今日もご報告しましたが、鞠智城を含む三城と、両槻宮、両槻の離宮しかないということで、実際的には文献からはなかなか難しいということに気づきました。

それで、結局、この時期の国際的な危機をどのように感じていたのか、そしてもう一つは、繕治するのは命令しただけではできませんから、国内的に繕治するような状況がどれくらい整っていたかという、ある意味では非常にオーソドックスなやり方で考えていかなければならないということを感じています。

対外的な危機というと、八世紀の初頭まではもう少し続くのでしょうか。確か七一九年、養老三年に「備後国安那郡茨城、蘆田郡常城を停する」とあり、七一〇年代までそういうのが続きます。七〇〇年前後はもうひとつよく分かりませんが、今日も紹介しましたが、むしろ六九八年以降からいいますと、日本列島では南島の問題とか、薩摩・大隅の建国の問題のほうが多く史料に出てくるよう

になります。結局は、薩摩とか多櫛とか、最終的に大隅の国司に対する反乱も起こるというわけです。

ですから、国際的という面を考えるとどうかという面もありますが、一つには、発掘調査の成果を見る限りでは、今日ずいぶん話題になりましたコの字型配置の建物群や八角形建物の出現であるとか、一方、兵舎的なものが減るという報告もありますので、むしろ別の意味を持ってきたのではないかと、というようにしか考えなかったのですが。

そうすると、最初の築城の時に正史に記録が無い阿志岐城や、九州北部、特に福岡でも、歴史的史料に記録がない城をどう考えるかということになります。阿志岐城の場合は、『万葉集』に「蘆城」という名で歌が出てきますが。

それから、もう一つ考えていたのは、整備するということですが、ちょうど国分松元遺跡から戸口の変動記録のような木簡が出土していて、そこに「兵士」という記載があります。

『日本書紀』には、庚午年籍以降も、飛鳥浄御原令だと思い



パネルディスカッション会場③

ますが、戸令に基づいて戸籍を作る際、やはり、「兵士」が区別されていたのではないかと思いますし、『日本書紀』の記述が正しければということになりますが、天武十二年や持統七年には、諸国に陣法博士を遣わして兵法を教習させるとの記載があるんですね。

実は、私は、日本の軍事制度というのは、白村江の戦いともう一つは壬申の乱と、二つの影響を受けて軍防令が構築されていると考えています。研究史を見ると、対外戦争のみで、国内的な条件を考えない方もいらつしやいますが、私は両面あるものと思うんですね。ただ、諸国に陣法博士を遣わせるとありますから、軍団制度がはっきりしない段階では、これはやはり国宰とか、どういう人たちにやるのかということが、そこはもうひとつ分からないのですが。

今日、森さんが言われましたように、どうも山城に関しては大宰や総領のほうがかなり力を持っているようですから、諸国に陣法博士を遣わして兵法を教習させ、それと同時に飛鳥浄御原令以降、戸令に基づいて戸籍が作られ、そこから兵士とか、正丁を徴発するシステムができてきましたので、かなり行政的に労働力編成が可能になりつつあるのではないかと思います。逆に言いますと、私は、天智朝の時は、どういう形で、おそらく人夫と称する、壬申の乱の時もそうでしたが、それを徴集するのだらうと思いますが、ただ、潜在的には、例えば七世紀になってから、やはり、古墳造った技術とか、寺院を造る技術とか、いろいろな蓄積があり、それをどのように指導するかというので、しかも新たな朝鮮式山城ということですから、百濟の技術者がいなければできなかったかというふうに

思います。そうになると、国際的危機が弱まるということが事実であれば、むしろ国内的な条件を重視したほうがよいのではないかと思っています。

ただ、繕治の内容は具体的には文献ではもう無理ですので、今日報告がありましたように、第Ⅱ期の考古学的な成果に基づいて、それを支えた技術労働力の変遷を考える必要があるかと思っています。ただ、八世紀に入りましたら、いろいろな考古の問題が分かるんですが、七世紀の後半が難しいですね。どのように技術労働力というのを維持していたのか。ただ、結果的に見れば、この三城が一〇世紀初めまで残ったわけですから、やはり大宰府にとつてだけでなく、当時の律令制国家にとつてはかなり重要な場所であったことは間違いないと思います。

佐藤…はい。ありがとうございます。

兵士の動員が戸籍の政策と同時に七世紀の後半に始まり得るというお話ですが、その場合は、やはり兵士を動員する主体というのは、国宰、後の国司になるのでしょうか、それとも地方豪族の評司みたいなもので、それを国司が統括するということなのでしょうか。

吉村…白村江の戦いで、おそらく豪族、国造軍といわれていますが、そういう旧氏族体制で戦って負けたわけですね。その後、おそらく中国的な^①といいますが、そういう官僚制的な軍事システムを作ろう

としたわけですが、ただ方針を出したからすぐにできるといわけではありませんし、今日も少し話題になっていましたが、奈良の平城京の一二門ですね。これは固有名詞ではなく「大伴門」とか、氏族の名称がついているわけです。ですから、奈良時代ごろになっても、ある氏族が主体となって門を建設した、氏族だけかどうかは分かりませんが、かなり関与しているということが分かります。七世紀後半の大宰府周辺、あるいは鞠智城に関しまして、旧豪族の力というのか、そういうものに依拠せざるを得ない面があると私は思います。

佐藤.. 矢野さんにお伺いしたいのですが、鞠智城の造営関係で、国内の郡レベルの地方豪族や人々の関与を示すような遺構や遺物はないでしょうか。米の荷札は菊池郡の人が米俵を運んで来ていたことを示していると思うのですが。

矢野.. そうした関与を示すような遺物は、現在のところ、「秦人忍□五斗」銘の木簡だけです。他には思い当たりません。

佐藤.. 今の議論の話の過程を受け止めていただいて、森さん、もう少し幅広くお話しいただけないでしょうか。

森

…吉村さんがおっしゃった軍事制度の変換ということは、天武一四年だったと思いますから、その時に大型の兵器、それから式具を、郡家というか、評家にまず集めるといふ話があつて、それを受けて、持統朝に陣法博士を派遣するとか、諸国に射撃を練習するための所を作るとかという形で行われます。ですから、天武朝の最後くらいで、地方豪族が持っていた軍事指揮権みたいなものがある程度集中させて、さらに次には国宰とか、軍団を作るといふ二段構えで、大宝令で軍団制ができて、統一的な軍制が確立されます。ただそれが、単に対外戦だけを想定したのか、国内に対する軍事的な支配、統治も含めてなのかというのは、また別々ということですが、私はやはり国内支配も関係すると考えたほうがいいと思います。そういう過程もありながら、山城の修復ということだと思ひます。

私が今日のシンポジウムの課題を頂いた時に、「繕治」に関する短い記事でどうするんだということと、とりあえず大宝前後のいろいろな政策がどうなっているのかということとを、あらためて様々な記事を挙げました。その時、一つは、お話ししましたように、越後の蝦狄に対して、という記事がかなりあり、なおかつ、ちょうど磐舟柵いわふねのきを修理するという記事があつて、それが出羽国の建設というふうにいえますことから、それと同時に、南方、南島関係の記事ですね。南島というのは、種子島についてはすでに推古朝くらいから出てくるとか、『隋書』の中の琉求伝というのがあつて、その琉球が沖縄なのか台湾なのかというのはあるのですが、その鎧を見せたところ、六〇七、六〇八年に行つ

た遣隋使が、これは掖久（屋久島）の人たちが着ている鎧だとか言っている記事があります。このように、推古朝ぐらいからもうすでに南島に対する目線というのがあって、それが様々な形でつながりを持っていき、奈良時代以降も、南東から大宰府に対して物品が献上されるという形が維持されるわけですね。ですから、南の方の南島の支配とか、隼人に対する支配という記事もかなりあります。

それから、もちろん律令制を、律令制というか地方制度を確立していくための、様々な法律の仕組みだとか、税制に関するような記事ですね。あるいは国司の権限を強化するというような記事もあります。特に、文武二年あたりに各地方の鉱産物を調査するという記事があつて、けっこう地域の中まで国の力を及ぼそうというか、精査していこうという流れがあります。その中にやはり北の方というと、日本海岸の出羽の方までの版図拡大ということと、南で言いますと、熊本県のさらに南の薩摩・大隅という、隼人の地ですね。そこをやはり律令国家の版図に組み込むということですね。それらはよくいわれている、天皇を中心として、いわゆる東夷だとか南蛮だとかいう文明化が遅れた人たちがその支配に従っているという、中国皇帝のいわゆる中華思想的な国家体制ですね。律令は結局中国の皇帝支配と関係しますから、当然律令に基づく国家を築いていくことは、やはりそのような支配構造というものもないといけないというか、それを作らなければいけない。

隼人に関しては、最近の隼人の研究では、いわゆる律令制下の日本の人たちと全く別の生活をしていたというのは怪しいのではないかと。つまり、隼人というのは作られた差別意識ではないかという

ふうな研究もあるようですが、そういう中で、やはり北方と南方に版図を広げていくという、その流れの中に鞠智城の整備も考えられないかと思います。

それから、鞠智城の繕治の次の年、文武三年、六九九年にやはり「大宰府をして三野・稻積の二城を修せしむ。」という記事があり、これも、他の山城は大概なくなっていくなか、大宰府の版図の中では、やはり山城が整備されていくということになります。ただ、この三野・稻積がどこにあったのか、吉村さんは確か薩摩の方と関係があるのではないかということで、南の方ではないかとおっしゃいましたが、大宰府の管理下にあるということで、さらに修理をしたということは、それ以前にこれはあったということですから、やはり北の方にあったとする見解もあります。場所が分からないと何とも言い難いのですが、鞠智城の繕治を含め、五つの城が整備されて、場所は北の方にあったとしても、三野と稻積が鞠智城と同じように南の方との関係なのか、それとも大宰府を整備するとか、そういう記事と関係あるのか、これもまた文献史料ですとこれ以上の記事がなくて、後にも先にも出てこないということ、非常に困るわけですが、やはり大宰府の中で、この三つの城と二つの城が整備されているというのは非常に特異なことであり、その中に鞠智城が含まれているということですね。

鞠智城に関しては、やはり時期によっても違うのでしょうか、先ほど、国府がやられても鞠智城があるから、北にあるから大丈夫だというような話もあったのですが、国府よりも北にあって、大宰府と連携できる位置にありますから、その点からいうと、南の方に対する一つの拠点として、実際に軍

隊を送って制圧するかは別にして、物資を蓄えたり、そういうような拠点を整備するということは、南との関係でこの時期に進んでもいいのではないかと考えています。

佐藤

…ありがとうございました。律令国家が中央集権的な中国を真似た小中華帝国を目指す時に、北も南も意識したということですね。これは「国内的」というべきかまだ意見があると思いますが、隼人の人たちが、蝦夷の人たちとの関係も出てくるということですね。

三野・稲積城については北九州説もあって、新日本古典文学大系本の『続日本紀』では、三野城というのは、筑前国嶋郡、糸島半島の、伊都国の近くですけれども、そこにある地名もあるので、そこではないかといわれています。実を言うと、その嶋郡の大領、郡司は、肥君猪手といまして、肥後国の地方豪族が、郡司になっていっています。肥君というのは、先程、日羅という人が百済の大臣格になったという話がありましたが、博多湾に面した郡の郡司にまでなっているという、対外関係の要衝を抑えているということもあると思います。

最後に、鞠智城の役割とその変化についてお話ししようと思っていたのですが、時間もございませんで、大変恐縮ですが、今日のこの議論を踏まえて、この四人のパネラーの先生方に、鞠智城をテーマとしてこれからの古代史を考えるとどういうことが課題となるか、どういう点が面白いのか、今日のご感想でも結構ですので、矢野さんからおひとりずつお話しただけだと思います。

矢野… 本日のシンポジウムは、西暦六九八年の鞠智城の繕治の実像を探ることがテーマで行っております。文献も限られています、実は、発掘調査の成果も同じようなことが言えます。例えば、城門

や土塁線などは、創建期に造られて以降、それを修理したとか、造り直したとか、そういったことが調査では明らかになっていません。大野城の中心の城門である大宰府口城門では、三期に及ぶ時期区分と変遷が明らかになっているのですが、そういった痕跡は全くないのです。この時期に、城内の施設は最も充実しますが、その周りの外郭施設については、今のところその時期に何をしたのか分かっていない状況です。

今後、鞠智城の繕治については、内容的にもさらなる検証が必要と思っていますので、本日のシンポジウムの内容を地元を持ち帰って、よく吟味し、鞠智城研究の課題として挙げさせていただきなから、さらに鞠智城の実像が分かるように尽力していきたいと思いました。

佐藤… どうもありがとうございました。それでは、次に、森さんお願いします。

森… 私は地方豪族の歴史も研究していますが、残念ながら、肥後国は郡司があまり分かりません。他へ行って郡司になった人、肥君は比較的大活躍しているのですが。ですから、先ほどの質疑応答の中

でも、鞠智城と現地との関係はないのかということ、例えば、素人的に言うと、土器が、菊池郡のものとか、熊本周辺のものとか、そういうものともし関わりが分かるのであれば、その郡司の動向が分かるのではないかと思いますから、是非そちらのほうは、在地の土器との関係がないのかどうか、教えていただきたいと思います。

「繕治」の後ということになると、鞠智城がもう一度文献に出てくるのは、九世紀の後半で、その時期は特に有明海方面もそうですし、博多の方もそうですが、新羅海賊の問題があります。新羅の国がだんだん終わっていく時期で、国が乱れて、生活できない人が海賊行為をするということもあるわけですね。そういう中で、鞠智城の記事ですとか、鞠智城に限らず九州一帯については、新羅海賊が攻めてくるから兵庫が鳴るという話があつて、やはり防衛という面と深く関わってきますから、そういう九世紀の国際関係の中での鞠智城というのも重要になります。

それから、全く時代は異なるのですが、鞠智城がある地は、中世の菊池氏という有力な武士団がいるところです。菊池氏は、もともと刀伊の入寇という、一〇一九年に朝鮮半島から刀伊という人たちが、一瞬ですけれども、九州北部を蹂躪するときがあつて、その時に活躍した藤原隆家の子孫ともいわれており、要は大宰府の官人になった人が、菊池氏の祖先になっているわけで、大宰府から肥後に土着するときにも、この地域は良い地域だと思うんですね。ですから、大宰府との関係がその後どうなっていくのかということも、興味深いのではないかと思います。

佐藤…次に、小田さんお願いします。

小田…「繕治」には大宰府が関わっているのは十分言えると思うのですが、「繕治」に至った根本的な理由と
いいですか、それが何だったのか、というのがありまして、例えば地震であるとか風水害であるとか、
そういったものも一つ理由にならないのか、そうであれば、そういった痕跡が遺跡の中から出てこな
いのか、地震の場合は、大野城・基肄城は近くですが、鞠智城は少し離れているという問題はあるか
と思いますが、自然災害的なものも考えながら調査にあたる必要があるのではないかと少し思いまし
た。

佐藤…それでは、最後に、吉村さんお願いします。

吉村…実は、今日、東北地方の問題に触れる時間がほとんど無かったのですが、東北地方の対蝦夷政策とい
うのは、史料の出方は、対日本海側は先ほどありました淳足柵のように出てきますが、太平洋側は出
てこない。ただ、郡山遺跡というのが仙台にありまして、これがほぼ孝徳朝くらいですか、かなり『日
本書記』に引っかけて解釈しているような面があると思いますが、七世紀半ばくらいになります。と

ところが、九州の場合は、全く史料に出てこなければ、まったく考古学に依拠しなければいけないのですが、少し出てくるのがややこしいところで、ただ逆に言うと、国分松元遺跡から出てきた木簡なんかを見ていきますと、この時期、本当に律令制国家の形成の途次であるし、大宰制、のちの筑紫大宰府ですが、筑紫大宰がどうなるのか、国司制度がどう変化するのか、戸籍が編成されて兵士制度・軍団制度がどのように整備されるのか、かなり総合的な問題があるということで、あらためて面白いというか、研究に必要だと思いました。

もう一つ、弁解ではないのですが、私自身『続日本紀』を読むときは、一応私も事務局長をやった、新日本古典文学大系の『続日本紀』をまず見ることにしているんですが、どうも一〇〇%正しいということにはならないところもありまして、その時の考古学的な発掘調査の成果などが偏っているとか、あるいはまだ分かっていないとか、ということもいくつかあります。

実は、今回も三野・稲積というのをどうするかということですね。かつては井上辰雄さんとか中村明蔵さんが言っておられるのですが、もし北の方にあるのだったら、文武二年に一体として修理をしてもおかしくないのではないかと。そこが違うのはどういうことなのかということで、三野城の場合は日向国の近くに地名が設定されているようですし、稲積の場合も大隅に設定、後の大隅に設定されていますが、この時期はまだ大隅国が建国されていないので、日向と考えられているようですが、まだ不十分なところがあるかと思えます。東北の官衙型城柵というのと、西日本の朝鮮式山城と、九州

南部に関してはどうも違った様相を見せてきていますし、どちらに入るか悩むよりは、むしろ、第三番目のカテゴリを作って考えたほうが役に立つというか、考えやすいのではないかと思います。結局、私自身、そういうような結論、仮説に至ったのは事実なんです。

ただ、まだ分からないことが多く、私自身も発表するとなると、ある程度責任あるものをお話ししようと思うと悩むことも多いし、逆に認識がかなり進んだということもありましたが、まったくないわけではないので、なんとか今後の出土資料に期待して、知事さんも言っておられましたが、やはりロマンを求めないとなかなか面白くない。結論が出ると、邪馬台国論争ではありませんが、あまり議論しても意味がないわけですね。あれはなかなか難しいのですが、そういった意味で今後もっと深めていけば、非常に面白いというか、古代史を解明する上で、絶好の素材を提供するのではないかと思います。シンポジウムの準備をするにあたりそういう感想を持ちました。

佐藤…ありがとうございます。西日本の山城や東北の城柵とは違う、「九州官衛型城柵」という新しい提示をしていただきましてありがとうございます。

律令制をめぐる様々な動向を総合的に考えていこうという際に、鞠智城が非常に重要な題材になるということが、今日のシンポジウムでも分かったと思います。これについてはこれからの調査・研究、

特に文字資料などがあればそれによって、さらに鞠智城の歴史的意義が明らかになっていくことを期待したいと思います。

これでパネルディスカッションを終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございます。